

各種資料整理

■作品・作家資料の作成整理

開館前より作品写真および作家文献の収集・作成・整理が行なわれており、写真カードや調書、文献コピー等がキャビネットに収められている。

- (1) 作家人名別ファイル(アイウエオ順)
- (2) 館蔵品資料(館蔵品番号順)
- (3) 出品作品資料(各企画展ごと)
- (4) 館蔵品収集に関わる資料(ジャンル別)

これらは各種の調査・展示活動や教育普及活動の基礎資料として活用されている。

■館蔵品などの写真・スライド作成整理

(1) 館蔵品

新収蔵品については、年度内にまとめて美術品写真の専門家による写真撮影をおこなっている。4×5インチまたはブローニー版のカラーポジを写真原板として受入番号順にホルダーに入れ、キャビネットに整理収納している。

なお、これまでの原板には撮影後10年が経過し、色の劣化が見られるものもあるので、予算の範囲で劣化の激しいもの、使用頻度の高いものについては、再撮影を実施し新しい原板を作成した。また、パソコンを用いた講座等が増えてきていることから、館蔵品の35mmスライドについては、デジタル画像への移行(下記)が加速されている。

(2) その他

館蔵品のほか寄託品、展覧会出品作品、調査作品についても、さまざまな形で写真撮影あるいは収集され、個別に整理されている。

■館蔵品写真のデジタル画像化

館蔵品の画像を、コンピュータで利用できるように、平成7年度から館蔵品を撮影した4×5インチまたはブローニー版フィルムのフォトCD化を順次進めてきた。

平成16年度から、新収蔵品およびフィルムが劣化した作品の再撮影の機会に、美術品写真の専門家に委託し、大型カメラでの撮影およびデジタル一眼レフカメラでの直接撮影を合わせて行なうように改めた。デジタル一眼レフカメラでの直接撮影が、実用レベルまで向上したと判断されたからである。

作成または撮影されたデジタル画像は、CDに保存され、インターネットのホーム・ページや研究会などで活用されている。デジタル画像が作成されていない館蔵品もまだあり、それらの遡及撮影が懸案となっている。

■美術情報の整理

開館以来、展覧会活動などの基礎資料として、各種の美術情報を収集している。

図書資料以外の美術情報資料の整理には、ボランティア有志による、資料整理グループ「グループD」があたっており、整理が進んでいる。

■展覧会資料の整理

企画展などの文書および資料については、各展覧会ごとに整理が行なわれ、キャビネットに収納されている。

■コンピュータによる各種データ管理

館蔵品データや図書データなどのコンピュータ化は市販のデータ・ベースソフト「桐」を使用し、以前より進められてきた。図書データの遡及入力作業には、ボランティア有志によりコンピュータ入力チーム(「桐の会」)があたり、平成16年度をもって一応完了した。新たに発生するデータについては、日常業務の延長上にデータが整っていく方向に道筋を作っている。

(1) 館蔵品

館蔵品の基本データと履歴データが入力されている。デジタル画像は、フォトCD化したものを中心に蓄積されており、主な作品については揃っている。未作成の作品について順次整備を進める必要がある。

履歴データは、5種(伝来・修復歴・展覧会出品歴・収蔵品展展示歴・文献掲載歴)のデータファイルで構成され、館蔵品受入番号をキーに基本データのファイルとリンク、さらに画像ファイルとリンクしている。新たに発生する履歴データについては、研究・修復・貸出・特別観覧等、諸業務と連動させ、それらの業務で作成されていくデジタルデータを移植している。

これらのデータの見直し作業や表記の統一などを随時実施、公開用フォーマットの検討を行った。データ公開へのコンテンツはほぼ整った。インターネット上での公開には検索エンジン搭載や著作権問題といった検討課題も多いが、ひとまず館内での公開を進める段階に達したといえる。

(2) 図書

図書は基本的な手作業によって収集・受入・整理作業が行なわれているが、平成4年度からはそれと並行し、順次データのコンピュータ化を進めてきた。平成16年度をもって、遡及入力も一応終了した。

なお新規受入図書については、図書担当職員によるデジタル入力での受入作業を行ない、図書カードや図書原簿なども連動しプリントアウト、順調に推移している。

平成16年度をもって、図書データのコンテンツは一応整ったので、カード検索からパソコンによる検索へと移行する段階によりやすくなったといえる。